

柳井雅雄

赤木吹原の古跡と伝説

富原神社とその周辺にある

直川村郷土調査会

柳井雅雄

○吹原安藤家と佐伯氏

直川村赤木の奥、吹原鎮座富原神社の祭神は、佐伯惟治父子、姫織大明神、大改龍神で、其後史并妄によると

天文三年(一五三四年)、安藤式部大夫の勸請とある。

現宮司安藤正作氏の祖先は安藤七郎武連と称し、日州富高翁々岡の城主であったが、応永二年の頃行舟八郎兼

屋の藤下であった時、佐伯山城守惟次の為、主家軒背一族が討ち亡びられたので、其の後安藤飛騨守義高は日州

長井に居城していたところ、文龜二年(一五〇二年)佐伯大膳夫妻惟勝の爲虜とされ、爾後佐伯氏の客分となり、惟

勝と其の嫡男惟治は高恩を受けていた。

時、惟治は、臼杵長景に討られ日州三河内歌糸村に

逃山に自刃(永永七年十二月二十五日)、其の長子千代鶴もま

大堅田郷野で自刃(其の父の後を追った)。義高の長子式部大夫は浪人して赤木村吹原の里に住み、惟治の恩誼を

思い、祠を建ててその靈を神と祭らたといふ。其の由は、
昔にこれが現在の富原神社の中継で、史實としては疑義なし
し、其のと思われざるが、今も伝わる伝説にも、真偽は別として、赤木村には惟治御討つたある教々の物語りがある。
佐伯氏が郡司として佐伯に封ぜられたのが始祖惟庸で

(建久四年(一一九〇年)、九代惟朝まで堅田御城村高城に統治の府を置き、十代惟治から十四代惟定までの史録(三書)一五三三)年、古市の梅牟礼城に拠つてゐた。此の間約四〇〇年、其の大部分は堅田郷であり、赤木とは境を接し、大越、吹原、野々内と道一筋である。隣国日州に通ずるには轟石神、陸地の三つの峠が戦略的に重要な拠点であつた。式部大夫が城を去つて、どうして吹原に浪人したか、
いて疑問を持つていたが、前述の日州に対する要所陸地の事を考え合せると、こんな決論が出ることも不思議でないと思ふのである。

安藤義高が客分として優遇されてゐたのは、長井の元城主であつたが故、隣国の事情に通じていたもので、日州に對する目付役として赤木の村を占えられ、吹原或は道の内に居住した——と考へると、式部大夫が吹原に浪人したのも、父の縁故の地として肯ける。また吹原、道の内にある安藤屋も義高の支流で、赤木村落に数多い安藤姓ともつながりがあると言へよう。勿論明治五年三月一日から實施の戸籍法によつて、支流の久遠が安藤姓を名乗つたものではあるが、当時、氏素姓を伝家の宝刀として、之によつてはこりを持つていた。封建的階級思想は根強いもので、道の内の如く五戸全部が安藤姓であることから考へると、義高は道の内に、式部大夫は吹原に居住したとも考へられる。後述する伝説を考察すると、道の内当主安藤万治郎氏が主流で、安藤義高とのつながりがあつたのではないが、今はこれを解明する何等の史料もないが、伝説を推理し古跡を研討し、史実は史実として傳説は其のまゝ伝説として、郷土文化の一片として遺した

いである。
さてこの古事を研討するには、惟治の史実の一部を知つて置かなければならない。

② 佐伯惟治の物語

佐伯惟治は十代榊牟礼の城主であつた。堅田の城は地勢海に臨み要害堅固でなく、防備に不利として古市に榊牟礼城を築き、君臣の道を正し武備に備へつとめ、農耕も養蚕も盛んにして領民の統治に意を用いたので、大友氏の幕下ではあつたが富国強兵の雄藩で、日州に對する防壁として重きをなしてゐた。佐伯氏十四代中に頭角を現わした智勇兼備の領主であつたが、何時の世にもある奸智の輩に「惟治異國あり」と國王大友義鑑に讒言され、持に隣國である臼杵長景は常に佐伯氏の富有をねたみ、事ある毎に悪計をたくらみ國王を動かした。

義鑑は遂に臼杵長景に命じて榊牟礼城を攻めさせたが、城堅固にしてなかく落ちない。そこで長景は兵糧攻めの策をとつて、城の周圍をかこみ、まず水の手を断つた。水源を占領されたこと、城兵には痛かつた。惟治は一計を案じ、櫓の外に馬を並べ、櫓の上から兵糧の白米を繰返しかけた。遠くから見ると宛馬を水で洗うように見えるので、長景は水攻めは駄目だとして、城中に使を送り、一時城を明け日州に赴け、神明に誓つて國主にとりなし、必ず帰城しよう努めると誓紙を送つた。家臣等は長景の奸計に乗つてはならないと諫めたが、惟治は起請文を疑うは神明をかゝることになるとして長景の提案を容れ、少教の家臣と共に日州三河内にさげようと、世子千代鶴と路を分ち城を出た。

ところが長景は日州新名堂と計つて、三河内歌系おたか七山に新名治部大夫大勢を引きつれ、惟治を迎え計つた。惟治ははじめて長景の奸計を知り、憤然大いに戦つたが衆寡敵せず自刃、家臣沙月三河守は三尺三十寸の大刀を腹に当て、左より右に引き廻し、其の刀を櫓に切

りつけて果てたと言ふ。此の審現存もあると伝えられてゐるかどうか。

世子千代鶴は父をしい日州に向かう途中にあつたがこの悲報を聞き、堅田の西野に自刃した。時に大永七年十一月二十五日、惟治三十三才、千代鶴は七才であつたといふ。(大友興成記、佐伯史談等による)

重後の國王大友修理大夫義鑑朝臣の幕下佐伯榊牟礼の城主佐伯薩摩守惟治と号する日祖母岳大明神の後裔緒方三郎惟宗十六代の末葉也。

然るに其の頃重後の諸城主佐伯の家を偏執し、惟治逆心を企つて大友家を七口さんとたくらむの旨を告げます。義鑑朝臣驚きたまひ、臼杵遠江守長景に二分余賙を相添え、榊牟礼の城を攻めうらしむ。されど城堅固にして落去せず、長景手段をめぐらし城中に言ひ送りける日、長景義鑑朝臣の下知によつて止む事を得ず。幾んど惟治に對し何の恨もなし、願くは開城あつて罪なき旨御説あらば長景身に替へても罪なきことを申し聞くべしと、即ち牛王法印の裏に起請文を書き血判をまつて云いおくる。是によつて惟治僅かの勢にて日向を指して落ち乘る。佐伯の内黒沢と云ふ所に多田弥四郎が娘若狭遇ふたり。惟治水とを乞ふ給ふ。女は新らしき板杓に水を汲み馬にすゝむ。惟治悦喜あつて、再び國に歸らば汝が志を報ゆべしと云ひて、夫より吾田可愛歸にかけれ住みぬ。山中数多く住居なりがたく家の子郎党等ちりぢりにて附添うものとして日沙月茶河守、野々下馬之亮主従計りなり。朝夕の糧盡きて落愈と拾ふこそ哀れなり。或る時一ところ山を降りてまいらすには是は何ぞと問ひ給ふ。是はところとて田夫の食にいたすものなりと申せば、惟治は驚き

侍の住居には憂きところかな

斯くて日敷を連れども長景の使もなし、大友家へ集
なき旨訴ふべき手段もなけれど、所詮神主に由緒あり
は伊勢の國に赴きて謀をなすべしとて吾田の浦辺より
船に乗らむと、三河内村の山越え、おたが古山に暫く
休足ありけるに、吾田の新名治郎長景より兼ねて内意
ありければ事を聞きつけ、新名治郎大夫多勢をもちつて
押寄する。四人の者共も防矢射かくる内惟治切腹、何
れも珍らしき働きして自害する。中には沙月参河守は
我が頼は三尺三寸の刀を左より右に引き廻し其の刀を
椿のありけるに斬りつけ置き果てたと、此の椿今にお
り。時は大永七年丁亥十一月二十五日、惟治生年三十
ニ。法證大機正徹大禪定門と号す。

惟治凡人にあらざるに、忽ち荒人神とあらわれ色々の
崇あり。馬上に水を進じたる若狭俄かに物に狂ふて惟
治の御託宣あり、無筆なるが能く手を書き、不思議とい
ふもあまりあり。是によつて惟治を宮野尾推現と崇め
御本山光定寺と号す。霊後の國黒沢の本社は是なり。霊
後の内に凡そ十ヶ所、日向の國三河内並に古江浦所々
に六ヶ所の宮居あり。祭礼今に急らず神託日々新た
なり。

惟治切腹隨身の甲冑木刀衣類等三河内古江の兩社に
あり。されば新名も長景も旬日を過かす死しけるは、
惟治の亡霊の祟りける也。
（白濁永年著「延慶世鑑」による）

⑤ 安藤家の伝承と古武器

佐伯惟治の世子千代鶴が父の訃を堅田西野の途上にお
り自刃したが、其の拵従者であつた家臣が遺品を携えて

吹原に落ち、吹原井手の原へ向ひの原とも言ふ、此處茂と稱す。
に社を建て父子を祭つた。

其の後室曆三年に宇宮の元（現在の地）に移し、氏神富
屋神社として安藤家と共に移り住み、子々孫々祭主とし
て現在に至つた。
御神体は千代鶴の遺刀とも云い、仏像とも云い伝えら
れている。この家臣安藤式部大夫の遺品として代々保存
されていた品に、鉈（つば）刀一振と弓一張、二枚羽の矢二本
があつたが、日支事変当時医師の井上弘氏（故人）に要請
され同氏に贈つた。（云々）

（右の考察）
戦前この神社は村社として村より幣帛供進が儀が行お
れ、筆者は供進使として二十数回大祭創祭に参殿したの
で、其の都度式部大夫の遺品に興味をもつて安藤家で拜
見した。

鉈長刀（國史大辭典）
無爪長刀は大友興隆記に見られども其の制、詳か
らざる。

とあり、源頼朝時代の武器、建久（二九〇年）より文祿（
五九〇年）頃までの兵器で珍らしく、
武器の歴史の上からは貴重な資
料といわれ、現存するものは
数ヶなく、この亡失は残念な
ことである。



史実では惟治父子の自刃から式部大夫の神社勧請に十
年のひらきがあるが、当時官衙の神社明細帳は明治時代
に作製せられたもので、史実と異なるのは致し方がないが
明治以来の社掌小野登代秀翁（故人）の手記に、家臣若
狭、吹原井手の原に社を建て其の霊を祭り、室曆三年に
至つて同村宇宮の元に移したとある。

式部大夫は、城中の職名、若狭は名乗りである。

私は最近安藤宮司に要請して、数度にわたる御神体と
林札を拜観したところ、千代鶴の遺刀は終戦後没収され
納めてあった箱書に

富尾大権現御神劔

宝曆二曆初秋洗多

大庄屋安藤勘左衛門代
神主安藤式部藤原吉晴

とある。蓋裏に三尺三寸の刀影が複製して残されてある
が、洗多とあるは万葉仮名をまじつた遷座であろう。

井手の原より現位置への歴史を物語る林札によると、
この式部吉晴は宝曆十年には平井姓を名乗り、赤木村堂
師は入居して近郷の神主となり、其の子孫もまた明治初
期まで奉仕している。故平井真毒美翁(ちよ長女平井真理子)
の祖先で、吹原栗藤家の枝族である。

御神体と称する仏像三体は、約四のセンチ位の釈迦如
來と菩薩如來、三五センチ位の聖觀音菩薩で、一見した
ところでは仏師の作とは思えぬ一本彫りで、ベンガラと
胡粉の色彩が施してある。

林札は宝曆年間より二十数枚に亘って保存され、現在
までの歴史思案に役立つ資料として、行事の年代、藩主
名、村役人など克明に誌され、貴重なものである。

④ 落武者についての道の内の伝承

其の昔、或る日赤木村道の内(陸奥州への部落)安藤忠右衛
門方を訪れた数騎の武者があった。中で大將らしい武士
は月毛の駒にまたがり、黒糸織の鎧を着し野太刀を帯び
ていた。

この者達は忠右衛門に食を求めた。忠右衛門は赤木一

番の富農で佐伯氏の年貢など取り扱い倍望厚く、赤木村
の権力者であつたので村人達を集め、何かと待遇至れり
尽くせりの世話した。二三日滞留したとも伝えられてい
るが、出發にあたり「若等此れより日州に赴くので、
不用の武器を預け置くと、鎧三領、野太刀一振、小刀
一振、鎗一筋を遺し、陸地峠に向つて出發した。
其の後まもなく惟治自刃のことが伝わり、安藤家では
屋内に神の間を造り祭壇を設け、この品々を祭り代々奉
仕した。この落武者は佐伯惟治主従であつたと伝えられ
ていた。

この品々は明治時代までは保存されていたが、其の後
は鎧一領と刀二振りが祭壇に置かれていたと故老達は話
していた。筆者が昭和二年神の間を拜見した時は大小二
振の刀をけてあつた。当主安藤万次郎氏は、三尺三寸の
太刀は吹原富尾神社に奉納、小刀は名刀として好都家に
懸かれ、度々持ち出されたが、刀に興味がなかつたので
いつか行方が明らからないようになつたと話っていた。

同家は朽ち果ててはいたが土蔵が二棟もあり、伝説の
神の間も現存している。尚天文十四年十一月薩將土持親
信と佐伯惟定の兵が戦つたコトノ原古戦場(赤木中津留川向
う)千人塚の供養塔は代々安藤家が祭つている。

(右の考察)

富尾神社は文献伝承に合致する点が多く、直川村内
でも由緒ある神社としての確証が出土、安藤家が日州長井
の城主の系流で、其の先祖達が赤木村文化に大きく功績
を遺した事が推測出来るわけである。

延明の御土史「延陵世鑑」による惟治が長井の可愛岳
に逃れ住んだとある、この点を考察すると、惟治は日州
長井の城主であつた安藤義高ゆかりの地可愛岳を選んだ
ことは至極もつともで、伝説を否定する資料は全く其

か真香及私など云々すべきものでないが、伝説によ
る道の内安藤家の伝承には、かぎりな真憑性があると言
えよう。この安藤家の枝族には旧家が多く、赤木村大庄
屋跡当主安藤徳治氏、安藤慶一氏、岡部三治郎氏、仁田
原岸、上戸高長生氏、岡細川内小野成之丞氏など、系列
は明らかでないが枝族と伝えられている。

直川村には、上直見沖のつるの富尾神社(享祿元年一五
二八)、赤木吹原の富尾神社(大永七年一五二七)、横川舟形か
鶴尾神社(天文元年一五三二)の三社が、惟治父子を祭神とし
て勧請、年代もほぼ同じく、明治十七年神社合祀布達ま
では惟治父子を祭神として神社は数多く、氏族の祭神と
した裏には、如何に直川村と佐伯氏の関係が、政治経済
文化の面で大きく交流があったことが立証される。

④ 吹原の笠地蔵

泉道赤木線吹原部落の入口道端に、大きな笠をいただ
いた六地蔵塔が、二基の五輪塔と何かを辨りかけるよう
に、板と椽二棟の古木の中に調和良く並んで建てられて
いる。其の笠は自然に傾き、壮大ななかにも幽玄さがあ
り、人里はなれて静寂な気があたりたようにうている。
それと道行く人は立ち寄り、合掌せねば気がすまないお
地蔵様である。

塔の高さは一・五メートル。台石正面に「願主(子)石上望」
右側に「明應五季二〇彼岸中」と銘記がある。明応五年
は元一四九六年、室所中期、佐伯氏九代惟勝の時代で、
この上段六面に六地蔵が刻まれ、その上に大きな笠を戴
き、宝珠は火焔で全く見事な塔である。
由来は明らかでないが、耳の病気に御利益があり、其
の昔近郷近在の老若男女が引きもきらず香華を供えたと
伝えておる。そして自然石に穴のあいたものや人工を加

えたものなど、大小さまざまな石が何百となく供えられ
あたり一面に散乱している。多分耳の型を供え祈願をし
たものであろう。

年代と正面の碑文を考へ合わせると、「玄願(医所)にすむ北
だ学者と考へられる。ひびきまずいて算ひあかめ奉り御地蔵
にお願ひ申します。衆生が諸々の病氣、わけて耳病に御
利益をおさすべし下さるよう」と建立供養し、玄願先生も
また耳病で苦しんでいたが、なかなかならなないで起を
後、お地蔵様におすがりしたのであろう。

六地蔵は延命、宝処、宝手、持地、空印、堅固の六菩
薩で、衆生済度には夫れ々異つた専門的知識を具現し、
常に大衆の中におつて努力し、教へ導き善根をよえ、温
かい心で懇々の手を差し伸べた最も人々に親しまれた仏
様で、人里はなれた淋しい恐ろしい所とか、峠や辻の路
傍にまつり、道行く人も道傍の首途が慈悲の心にはすかり
いつも見守つていたたことと、石仏や塔を建て供養した
のであるが、今も尚奇特な人が水難や交通事故、自殺者
のある所、大勢の遭難のおつた箇所、特に子供達の気の
毒な災難の場所には、再び繰り返すことのないようにと地
蔵様を建立し、供養しておるのは衆知のことと、此の建
立者も又菩薩であると云えよう。

地蔵左側の二基の上輪塔は、玄願先生夫妻が、或は其
の子供さんの墓石と考へられたい事もない。残念なこと
には泉道幅員拡張工事が昭和四十一年に行われ、基座が
掘り取られ樹木も伐り倒され、コンクリートの台座に階
段をつけ、昔の面影は消え何となく不似合で、郷愁また
ひとしおておる。

工事中にこんな話がある。工事施行者の新車ブルドー
ザが、お地蔵様の基座の湖をけずり落したので、塔三基
が転落した。とこゝろが新車のブルが故障もないのに停

てしまひ、也つと動き出したところ今度以下の田に転落、
 運転者が怪儀をする始末、どうもおかしい、不思議なこと
 もあるものかと、村の祈禱師におかんでもらつたらさあ
 大変、「お前達は此地蔵様を突き落すなど、不届至極じ
 や、お地藏様の祟りじやぞ」とおどされ、あわてて工事
 を中止、基座とコンクリートで造り奉安し供養したので
 工事は以後順調に進んだといふことである。田舎にお地
 蔵様でなく、玄碩先生が、ペニシリンが出来ても、昔は
 何百人の耳患者が救われ友のじやぞ、医は仁術じや、昔
 を思へ、昔を忘れるな、と物質文明に警告したのである
 う。

おなかしこ、おなかしこである。

(おかり)

資料

佐伯と 国木 田 独 歩 (由)

へ書簡集より

会 員 山 本 保

佐伯滞在中、友人に送つた独歩の手紙を、日竹順に紹
 介します。これを一読することによつて、佐伯の自然と
 彼の生活の一端を察知することができます。

(明治二十六年十月六日 考振所大久保湖州宛)

陳北氏去る九月三十日恙なく佐伯着、再後万事好都合
 に運び、一昨日より授業を始め候御休休神願上候。

到着後兩三日は言ふ可からざる一種の圧抑を感じ、万

事不平のみに不愉快極まり候へ共、只今日不思議にも多
 少土地にも馴れて為すべく雇はれし仕事だけはお友り前
 に務め居候。未だよく知り申さずと雖も先方も余り不満
 にも有らざるが如く思はれ候。(中略)

佐伯は山水の風景に意外に富み、山あり、河あり、
 郊外の散歩に至極妙に候。(中略)

此前の教師(独歩の前住者、慶応出身久米孝次郎氏)が英諾彦別極
 まる者に候間、教方(英語リーディング)には随分骨の折れる
 授業に候。(下略)

(注) 佐伯赴任の途中、九月二十二日考振所(滋賀県)に下車した独歩
 は、東京専門学校時代の友人 大久保湖州(本名余所正郎)と訪問し
 ました。

佐伯着任(通問後、大久保湖州へ送つた手紙です。佐伯の自然が独
 歩の心をなぐさめました。

(同) 十月十日付 東京 田村三治氏宛

友なきが故に殆んど慰むる処なきに似たりとも、幸に
 愚弟(成二)同道中ゆえ全くは寂びくと感せず雨の夜には
 共に語り、道を行きては共に希望を談ず。又以て住み慣
 れたる客情を慰むるに足る。(中略)

学校の事万事好都合にて日々授業致し居候間、之れま
 た幸に御休神を乞ふ。先輩並に生徒への愛けも至つて宜
 しき方也。小生の学校の名は鶴谷学館と称し、小生は教
 師並に館長なり。また殆んど凡ての取りしまり役也。

小生もと教師を好まず、ただやむを得ずして此に及ぶ
 たるが故に、心事何となく自由にして、ただ一直線に職
 業に尽すの外、また納れらるる事に付きての例のあるま
 じき心配少しもなく、たださんずんやるが故に、反つて
 先方から異服尊敬致す傾あり、大いに喜び居候。(下略)

(註) 東京専門学校時代の友人 田村三治(送つた手紙です。

愛着倍二(十六才)を同様していたことが独歩の独歩の教、他方教